

研究論文

運動部活動における性や恋愛に関する 会話・言動を通じた体育教師の主体形成

三上純

要旨

先行研究では、ジェンダー規範を身体化した体育教師の再生産について、運動部活動における性や恋愛に関する会話・言動の機能的側面に着目した議論が行われている。しかし考察の中心は男性集団にあり、そこで生きる人の心的な生には十分に目が向けられていない。また、そうした体育教師の再生産への抵抗の可能性は十分に論じられていない。本研究では運動部活動における性や恋愛に関する会話・言動を体育教師の主体形成における重要な実践と捉え、女性の経験やそこで生きる人の心的な生を視野に入れてその実態を分析する。その上で、ジェンダー規範を身体化した体育教師の主体形成と、その再生産への抵抗の可能性について論じることを目的とする。分析の対象は、中学校・高校で運動部に所属した経験のある18名である。バトラーの主体化＝服従化の理論、セジュウィックのホモソーシャルリティとそれに関する堀江の解釈を分析枠組みとした。分析の結果、男性集団ではミソジニーとホモフォビアが「ジョーク」によって作動しており、それは「傷つく人はいない」という前提のもとで行われていた。また、女性集団の会話・言動には、性的に客体化される女性の位置や、それゆえにレズビアンが抹消される状況が影響している。そして、体育教師として生徒が行う「ジョーク」に対応する方法として、協力者は自身が服従してきた規範に従った方法を想定していた。これは、運動部活動を通じたジェンダー規範への服従が体育教師の主体形成と関連することを示している。しかし同時に、運動部内での「ジョーク」は「傷つき」や「抵抗感」を生み出している。それは、運動部活動を通じた「良心的」な体育教師の主体形成に疑問を付すものである。さらに、そこで心的な「傷つき」を抱えた人が、「ジョーク」の問題性を伝える体育教師になっていく可能性も見出された。ここに抵抗の可能性が開かれていると考えられる。

キーワード：

心的な生、主体化=服従化、ミソジニー、ホモフォビア、ホモソーシャリティ

1 問題設定

本稿は、中学校・高校で所属した運動部活動における性や恋愛に関する会話・言動の分析を通じて、体育教師の主体形成について論じるものである。

先行研究では、ジェンダー規範を身体化した体育教師の問題が検討されてきた。例えば、体育教師は男・女のカテゴリーによる生徒の把握を当然視していること（井谷 et al., 2006）や、男女共習への考え方が性別二元制に基づいていること（加藤 & 佐藤, 2023）が指摘されている。また、体育専攻学生のうち、特に男性のホモフォビアが強いこと（O'Brien et al., 2013; 三上 & 井谷, 2018）や、体育教師がホモフォビクな言動に介入しない状況（Morrow & Gill, 2003）も示されている。

ジェンダー規範を身体化した体育教師の主体形成を考えるためには、次のような「体育教師の社会化」研究の知見が重要である。そこでは、体育教師教育への参入には運動部活動を通じたスポーツ経験が強く影響し（Dodds et al., 1991; 朝倉 & 清水, 2011）、スポーツで培われた価値観や信念が体育に反映されること（Hutchinson, 1993）、教師教育参入以前に形成された価値観や信念は教師教育では変容しがたいこと（Doolittle et al., 1993; 朝倉, 2016）が指摘されている。このように体育教師の身体性は運動部活動経験を通じて形成される（坂本, 2013）。ゆえに、ジェンダー規範を身体化した体育教師の主体形成も運動部活動経験に着目した検討が必要である。

三上は一連の研究により、この点を検討している。三上（2020）は、体育専攻学生にインタビューを行い、特に男性運動部集団において、指導者―生徒間や仲間同士でのホモフォビクな「ジョーク」を通じてホモソーシャリティが構築されており、その文化になじみ従うことで体育教師への社会化の道が選択されると指摘する。続く研究では、この指摘がミソジニスティック／ホモフォビクな会話・言動に着目した統計分析により検討されている。その結果、運動部活動における性や恋愛に関する会話・言動の多寡が、男性=性的主体／女性=性的客体とみなす態度や男性同性愛への嫌悪と正の関連を示す（三上, 2022）と同時に、運

運動部顧問志望を経由して間接的に体育教師志望に通ずること（三上, 2023）が示されている。

このように先行研究は、運動部活動における性や恋愛に関する会話・言動を通じたジェンダー規範の身体化が体育教師の主体形成の問題として捉えられることを示してきた。しかし、考察の中心は男性集団にあり、ホモソーシャルリティの構築が女性の経験といかに関係するのかが明らかではない。また、そうした会話・言動の機能的側面は分析されてきたが、そこで生きる人の心的な生には十分な関心が払われてこなかった。さらに、議論の焦点はジェンダー規範を身体化した体育教師の再生産に集中し、それへの抵抗の可能性は十分に論じられていない。

本研究では、運動部活動における性や恋愛に関する会話・言動を体育教師の主体形成における重要な実践と捉え、女性の経験やそこで生きる人の心的な生を視野に入れてその実態を分析する。その上で、先行研究の知見を踏まえつつ、ジェンダー規範を身体化した体育教師の主体形成と、その再生産への抵抗の可能性について論じることを目的とする。

2 理論枠組み

2-1 主体形成について

本稿ではButler（1997/2019）に依拠して体育教師の主体形成を捉える。Althusser（1995/2005）を参照しながら、Butler（1997/2019）は、主体は法による呼びかけに振り向くことで生まれるのだと述べる。つまり主体は「振り向き」の前には存在せず、法の権威を取り込むことによってのみ主体となる。したがって、法への服従は主体が存在する条件そのものである。

この主体化=服従化は「良心」の形成を伴う。良心とは「主体を自分自身にとっての対象とし、自分自身について省察し、自分自身を省察的に反省的なものとして確立する手段である」（p.33）。そして、良心の形成は「正しい」ノウハウ=技能の習得とともに遂行される。「職務を「良心的に」遂行することは、それらを言わば繰り返し遂行すること、これらの技能を再生産することであり、それらを再生産することで支配=習得を獲得することである」（p.150）。つまり、このような一連の技能の習得は、規範を身体化することでもある。この過程において主体化=服従化はより完全なものになり、良心が強化されるのである。

しかし Butler (1997/2019) によれば、「規範は、心的なものであるとき、単に社会的権力を再任するだけではなく、極めて固有の仕方、形成的かつ可傷的なものとなる」(p.32)。規範は、反復的行為によってのみ規範となるが、それによって主体の心的な生が統制し尽くされることはない。つまり、心的な主体化=服従化は、その主体の存在を可能にした規範の範囲と一致しない。この偶発的な「ずれ」から、規範への抵抗を可能にする「行為能力」が生じる。そのため、規範への抵抗を考えるためには、第三者に観察可能な形で外的に表出された行為だけでなく、主体が個人的に営む心的な生に目を向けなければならない。この観点からすれば、運動部活動における性や恋愛に関する会話・言動について心的な生を視野に入れて分析することは、その主体化=服従化を通じた体育教師の再生産への抵抗について論じることにつながるのである。

2-2 ホモソーシャリティと「ジョーク」について

性や恋愛に関する会話・言動の分析には、Sedgwick (1985/2001) によるホモソーシャリティ概念を用いる。ホモソーシャリティは、男一男一女の三角形を基本図式とし、「女の交換」によって結ばれる男同士の絆を意味する。それは社会形態の骨格をなし、女性を排除するよう見える男同士の絆にも女性是否応なく組み込まれる。本稿では、男同士の絆を強固にするために、女性を性的に客体化し、象徴的な財とみなすメカニズムとしてミソジニーを捉える。

Sedgwick (1985/2001) によれば、男同士のホモソーシャルな絆とホモセクシュアルな絆は「潜在的に切れ目のない連続体を形成している」(p.2)。しかし17世紀後半以降、この連続体はホモフォビアによって切断されていった。ホモフォビアとは単なる嫌悪感情ではなく、「特定の弾圧を少数派に加えることによって、多数派の行動を統制するメカニズムである」(p.134)。本稿では、ホモセクシュアルな絆だとみなされるものへの攻撃によってすべての男同士の絆を統制し、ホモソーシャリティを構築する主体となるよう水路づけるメカニズムとしてホモフォビアを捉える。

この枠組みの中で女性の経験を考えるためには、男性のホモソーシャル連続体が断絶しているのに対し、女性の場合は連続体を成しているという Sedgwick (1985/2001) の指摘が重要になる。堀江 (2015) は、この差異を「レズビアン

不可視化」という観点から整理する。ホモソーシャルリティは「交換する男」と「交換される女」という権力関係を前提とするため、女性同士の関係において男性は媒介項の機能を果たさない。そして、ホモソーシャルリティによって維持される「異性愛主義は、女に対して、男と結びつくことによってしか〈生〉を成り立たせることができないという土壌を生み出す。それは、レズビアンを不可視化し、抹消する機能を果たす」(p.148)。本稿では、同性同士の絆の差異という観点から、女性の経験を含めた分析を行う。

本稿では、ミソジニーとホモフォビアを作動させる会話・言動として「ジョーク」や「からかい」に注目する。江原(2021)によれば、「からかい」は伝聞や自明の事実のように語られることで匿名性、普遍性、自明性を帯びる。それは通常、見知らぬ他者には向けられない、親密性を確認させるものである。しかし強者から劣者への「からかい」は、攻撃の意図を隠すことで社会的な非難を避ける効果をもつ。「からかい」への抗議は「それ自体が敵対関係の表明」(p.254)と解されてしまうため、抗議の意思をもつこと自体が難しい。ゆえに「ジョーク」や「からかい」は、抗議の声を封じながら主体化＝服従化を安定させる実践として捉えられるのである。

3 研究方法

本稿では、2022年4～9月に実施したインタビュー調査のデータを使用する。協力者は、2021年2～7月に実施したアンケート調査で任意のアドレス記入欄に回答があった人への連絡と、その人たちを起点としたスノーボールサンプリングにより募集した。本調査は大阪大学大学院人間科学研究科教育学系の倫理審査を受けて実施した(承認番号:20029)。

インタビューは、教員志望のプロセス、中学校・高校で所属した部・クラブの状況、印象に残っている指導者、部・クラブ活動における性や恋愛に関する指導者の言動と仲間同士のコミュニケーション、学校生活における性や恋愛に関する教師の言動と生徒同士のコミュニケーションなどについて、アンケートへの回答を確認・深掘りする形で行った。終了後に文字起こしデータを送付し、事実と異

Table 1 分析対象者

実施日	名前 (仮名)	出生時に割り当てられた性別	性自認	性的指向	インタビュースタッフの立場	インタビュースタッフ時の 志望・検討教科	中学校の 部・クラブ所属	高校の 部・クラブ所属	体育教師を 志望した 経験
5/1	結城	男性	男性	相手の性別は問わない	大学院生	保健体育	陸上競技	陸上競技	あり
5/12	佐藤	男性	男性	女性	学部生	保健体育	陸上競技	陸上競技	あり
5/13	畠	男性	男性	女性	大学院生	国語	ソフトテニス	ソフトテニス	なし
5/15	佐藤守	男性	男性	両性	学部生	教員志望なし	陸上競技	硬式テニス	なし
5/24	まさ	男性	男性	女性	大学院生	小学校 (現) 小学校教員	軟式野球	陸上競技	あり
6/4	はち	男性	男性	女性	(現) 小学校教員		陸上競技	陸上競技	あり
6/5	岩本圭	女性	ノンバイナリー	特定の人を好きにならない	学部生	教員志望なし	水泳	水泳 (マナージャー)	なし
6/12	山田	女性	Xジェンダー	相手の性別は問わない	(現) 小学校教員		陸上競技	陸上競技	なし
6/24	鈴木	女性	Xジェンダー	男性	学部生	社会	バスケットボール	ウェイトリフティング	なし
7/12	L	女性	Xジェンダー	相手の性別は問わない	(現) 非教職		バスケットボール	サッカー	あり
7/16	田中咲	女性	女性	男性	学部生	小学校	軟式テニス	硬式テニス	あり
8/22	今井	男性	男性	女性	大学院生	保健体育	硬式野球(学外)	硬式野球	あり
8/23	高橋	男性	男性	女性	(現) 高校保健体育教員	硬式野球(学外)	硬式野球(学外)	硬式野球	あり
8/23	中村	男性	男性	女性	学部生	保健体育	軟式野球(学外)	新体操	あり
8/28	小林	男性	男性	女性	大学院生	保健体育	水球(学外)	水球	あり
8/29	平野	女性	女性	男性	学部生	保健体育	バスケットボール	バスケットボール	あり
8/31	山本	女性	女性	男性	学部生	保健体育	バスケットボール	バスケットボール	あり
9/27	渡辺	男性	男性	女性	学部生	保健体育	バスケットボール	バスケットボール	あり

Note. 性については、事前アンケートへの回答についてインタビュー時に確認した上で記載している。

なる点や修正・オフレコにしたい箇所の確認と仮名の決定を依頼した¹。

分析にはRiessman (2008/2014) によるナラティブ研究法のうち、テーマ分析を用いた。まず、仮名の決定までを終えた19名の語りを熟読し、各協力者のストーリーの特徴を把握した。次に、語りの文脈に留意しつつ、先行研究の知見を念頭に置いてコーディングを行った。類似するコードが複数生成された場合、それらをまとめる上位コードを設定した。その結果、①進路選択・教員志望、②部・クラブ活動経験、③性や恋愛に関する経験、④教員養成段階での経験、⑤保健体育・部活動への認識、⑥教員イメージ、⑦性の多様性について、⑧教員としての経験、を上位コードとするコーディングツリーが作成された。

その後、中学校・高校で運動部に所属した経験のない1名を除く、運動部経験者18名を分析対象とした (Table 1)。コード③に焦点化して具体的な語りに立ち返り、③と密接に関連する他のコードにも目を配りながら分析を進めた。その際、筆者の解釈と矛盾するコードがないかも確認した。なお、分析対象には体育教師・教員志望でない人も含まれる。性や恋愛に関する会話・言動を通じたホモソーシャルな文化への順応が体育教師の主体形成と関連することから、対象者を限定しないことで、その文化に順応しない人の経験も視野に入れるためである。本稿で引用する事例は、特に断りが無い限り、同じ運動部に所属する部員同士での会話・言動である²。

語りの引用に際しては、協力者の匿名性と可読性を確保するため、意味が変わらない範囲で文章を修正する。必要な補足は [] で、中略は […] で表す。

4 性や恋愛に関する会話とミソジニー

4-1 男性集団におけるミソジニスティックな会話とホモソーシャルリティの構築

運動部活動における性や恋愛に関する会話として、女性・男性集団³ いずれに

¹ 仮名には姓のみ、姓名、アルファベットのみなどの表記が混在しているが、本稿では希望された仮名をそのまま使用する。姓名が含まれる仮名は初出時のみフルネームで記載し、以降は姓のみを記す。ただし「佐藤」という姓は2名いる (佐藤さんと佐藤守さん) ため、佐藤守さんについてはつねにフルネームで記載する。

² 運動部活動での経験を尋ねた際、活動中だけでなく学校生活や学校外での部員同士の会話・言動も語られた。そのため本稿では、活動中に限らず部員同士の会話・言動を広く分析対象とする。

³ 「女性集団」「男性集団」という表記は、協力者の所属した運動部がどちらの性別を前提

属していた人からも「付き合った／別れた」「交際相手と遊びに行った」などの話題が語られた。それは「嬉しい」「楽しい」という感情を共有するものだったという。しかし、共有される経験の範囲や語られ方を深く聞き取ると、性行為を含む経験が男性集団では広く部員同士で共有される事例が見られる一方で、女性集団では個人的な相談などの形で語られる傾向が見られた。本節では、まず男性集団の会話とその問題性を指摘する語りを分析する。その後、女性集団の会話を分析し、男性集団との差異を論じる。

高校で硬式野球部だった高橋さんは、「彼女」ができた部員に「お前どうなん？ [性行為を] したん？」などと尋ねることで性的経験を聞き出し、盛り上がる「ノリ」があったと語った。筆者が「盛り上がるときに、生々しい話までするんですか？」と尋ねると、高橋さんは次のように語った。

高橋：ああ、そうですね。「何からしたん？」みたいな。もう高校生、やっぱそうですね。AVで見た内容「ほんまにあんなん？」とか話したりとか。いやもう、そうですね。話してました。

筆者（以下、筆）：ああ。相手がどんなだったとか、なんか、そんなことも話すんですか？

高橋：そうですね。お前の彼女、胸大きいとか、見たら分かるじゃないですか、大体。そういうところで「どうやった？」みたいな。みんなで聞いたりとかしてました。

同様の内容について、小林さんは「キスとかセックスとかそういう話が出てから、みんなが深掘りしてくみたいな感じ」と語った。ただし高橋さんと小林さんは、性的な会話は仲が良いからこそできるものだと言った。まささんも、性的な会話は「その集団だけです話」であり、「集団性がある面白い」と語ってい

に構成されていたかを示す。ただし、男女を構成員とする運動部に所属した人の経験についてこれらの表記を用いる場合は、その経験が「女性／男性だけ」を前提とする空間で生じたことを意味する。また、個人を指す「女性」「男性」の意味は文脈に応じて使い分ける。例えば「女性として活動していた」という表記は、協力者が「女性」のカテゴリーに属する人として活動していたことを意味する。また、語りに登場する他者の性別に関する表記は、協力者が認識する当該個人の性別を示す。

る。つまり、女性を客体化するミソジニスティックな会話は、誰それ構わず行われるものではないのである。

この点に関して、はちさんは「お前彼女できたらしいな」みたいな。[…]
「よかったなあ」みたいな。「がんばれよー」って」という会話はあったが、「部活はその程度だった」と語った。中高一貫校で6年間同じクラスだったのはちさんにとって、中学時代から仲の良いクラスの4人グループが「ふざけ合える場所」だった。そこでは「お前 [性行為を] やったん?」とか、なんかそんな話は日常茶飯事」であり、こうした会話ができるのは「お互いに悪ふざけし合ったりとかできて […] 受け流せる関係値があるから」だという。運動部でミソジニスティックな会話を経験しなかったのはちさんの語りは、逆説的にそうした会話に関係性に支えられることを示している。

こうした会話に対しては、まささんや高橋さんのように「楽しい」「面白い」と捉える認識や、小林さんのように「またあいつあんなこと聞いてるわ、言うてるわ」といった無関心かつ許容的な態度などが見られた。男性集団に属していた11名のうち、そうした会話の問題性に触れたのは中村さんとはちさんだけだった。ミソジニスティックな会話は、基本的に無害なものとして認識されているのである。

この認識は、性的な会話は男性集団内で完結するという認識と関係する。例えば佐藤さんは、性や恋愛に関する「いじり」などをする場について、「男子部室だったんで […] そこで話してたんで」と語った。また、男子ソフトテニス部に所属した畠さんは、教室などで女性にそうした会話が聞かれると「印象が悪くなると思ってたから、聞かれないようにしよう」という感覚があったという。さらに渡辺さんは、先輩が性行為の経験を共有していたことについて「本人たちがいいなら、いいかなって思ってた」と語った。筆者が「その相手が性行為をしたということも一緒に共有することになるという点について、引っかけたこととかはないですか?」と尋ねると、渡辺さんは次のように答えた。

渡辺：そこは絶対いじらないじゃないですか。なんか日常生活で、その相手さんに向かって、そういういじりは、性行為絡みのいじりなんかもう絶対しない。こっちが知って、こう内に「あ、そうなんや」って思う、落とし込む

だけなんで。だから別にそこは大丈夫かなって思いますね。

このようにミソジニスティックな会話は「親密な男性同士の空間」で完結するがゆえに無害であると認識されている。言い換えれば、こうした論理でミソジニスティックな会話を無害なものとして認識させる「良心」が形成されているのである。

4-2 ミソジニスティックな会話の無害性という幻想

だが先述の通り、ミソジニスティックな会話の問題性も語られている。中学時代、中村さんは同級生から交際相手の名前で呼び続けられるという「からかい」を経験した。筆者がそのときの対応を尋ねると、中村さんは次のように語った。

中村：記憶があんまり定かじゃないんですけど、中学生のときなんで。笑ってごまかせたときもあると思うんですけど […] 精神的にしんどいときとかもあったと思うんで。そういうときは、もう本当に、いつもは内心で怒っているだけなんですけど、まあ、顔に出ってしまったかなと思います。 […] 行動に出すことはなかったかなとは思いますが。

筆： […] 内心はたぶん、すごくこう、しんどい思いとか、怒りとかあったと思うんですけど。それをやっぱ行動とか言葉とかには、あまり出さなかったのはなんでですか？

中村：関係、関係を崩したくないっていうのが大きいのかなと思います。やっぱり怒ってしまうと、その後の空気が悪くなるとか。そういうのをやっぱり、そっちの方を優先してしまって。

これは同級生からの「からかい」であり、運動部での出来事ではない。しかし、まささんや今井さん、高橋さんは運動部内での同様の「からかい」について語っている。したがって、同様の「からかい」が運動部内でも心的負担を生み出していることが推測される。そして「からかい」の性質により、「ミソジニスティックな会話の無害性」という前提と齟齬をきたす心的な生は、「笑ってごまかす」「行動には出さない」という行為の強制によって覆い隠されるのである。

また、はちさんは先述の4人グループで性行為をした相手の身体について話す

ことがあったという。そうした会話については、「4人の仲間内でするんであれば、まあ別にいいんちゃうかなと思います […] なんか成長の中の健全な過程なんかと思うんですけど」としつつ、「何となく嫌やなと思ってた」と語った。それは「相手の体のこと言ったんが、なんかで伝わったりとかってというのはなんかよくないし」「十分に広まる可能性はあった」からだという。はちさんはグループ内の会話が外部に広まる可能性を想定し、ミソジニスティックな会話の問題性に言及している。

高校の陸上競技部で女性として活動していた山田さんは、ミソジニスティックな会話が「親密な男性同士の空間」で完結するという認識に反する経験を語った。山田さんには部内に「関係をもった人」がいたが、その事実は「みんな知らないはず、で、自分も仲が良い人にしか言ってないはず」だった。それにもかかわらず、「男子の先輩から「お前、あいつと」と言われ、「[関係をもった相手に] 聞いたら、やっぱり向こうが言ってたらしくて。「ええ、死んでしまえ」って」と語った。筆者がそのときの感情をより深く尋ねると、山田さんは次のように語った。

山田：そのときは高校入学してあんまり経ってない頃にそれを言われたので。すごい嫌でちょっと泣いたと思います。 […] 結局、高校3年間を通してその人と関係をもったことは、いじり、まあ毎日言われるとかじゃないですけどね、いじり続けられたし。

この語りは、ミソジニスティックな会話が「親密な男性同士の空間」で完結するという認識の誤りを示している。前項で見たように、交際相手とのプライベートな関係、つまり性的に客体化された女性の存在は、親密な男性同士の関係の中で利用されている。そして、山田さんに「お前、あいつと」と言う男性の存在は、男性集団内のミソジニーが女性のいる空間に滲出する様相を示している。しかもそれが「3年間を通して」継続した事実は、山田さんの抗議の声が「いじり」によって封じられていた可能性を示唆する。ホモソーシャルリティがミソジニーを必要とし、それが女性のいる空間へと拡張されうることから、「親密な男性同士の空間」が決して「男性だけ」の空間ではないことが指摘できる。

4-3 女性集団における性や恋愛に関する会話

女性集団について、「付き合った」などの情報が広く部員間で話題になることは男性集団と共通していたが、経験が共有される人の範囲や語られ方に差異が見られた。例えば平野さんは、性行為に関しては「内々で「どこまでいった?」」などの会話があったと語る。「内々で」という表現は、先に語られた「相談はあんまり大人数でしないというか。まあ内々に話すぐらいなんですけど」という説明を踏まえたものである。「内々で話すときは、どのような内容を話すんですか?」と尋ねると、平野さんは次のように語った。

平野：例えば「え、どこで?」とか。中高とかやったらみんな家やから「いつ?」みたいな。そういう時間とか場所、「家族おったんちゃうん?」とか、そういう話。なんか内容、行為自体の内容というよりは「え、ばれへんかったん?」とか、そういうなんかもう物珍しさに。

性行為の具体的な内容が話題にならないことは、他の協力者からも語られた。鈴木さんは、「私の周りは本当に下ネタに寛容と言いますか […] 全然話してたんで」としつつ、「知っている人同士のやつって聞きたくないなあ」と感じ、「性行為の話はあんまり聞いてはなかった」と語った。また、岩本圭さんは次のように語った。

岩本：やっぱり女の子たちの部員の間で、なんか経験がある子とない子がいて。経験ない子がある子に「どういう感じなの?」みたいな。「痛い? 初めでは、やっぱり」みたいなこと。 […] なんか情報ですよ、いわゆる。ネットでも確かに調べようと思えば調べられるけど、実体験を聞きたいみたいな。気になる、みたいな。

筆： […] その相手がどうだったとか、そんな話は全然しないわけですか。

岩本：ほとんどしない、ないですね、うん。

具体的な性行為の内容を含む会話は、他の協力者からも語られなかった。ただし岩本さんには、部内で男性と交際していた女性から、その男性との性行為につ

いて個人的に聞いた経験があった。筆者がその内容を尋ねると、次のように語られた。

岩本：なんかペニスが大きかったっていう話と、「なんか上手かったんだよね」みたいな。「絶対私、童貞って嘘つかれてると思う」みたいな。「これ、私が初めてって嘘だと思う」みたいな話で。「もうくそどうでもいいわ、そんなこと」みたいな感じで、はい。

筆：それはもうなんか、すごい仲良い。

岩本：ああ、めっちゃ仲良い、一番仲良かったんですよ、部活の中で。[…]
なんかそれを機に、私はその「知ってる人の話をしないでほしい」って、その子をお願いして。つまりその、浮かんできちゃうので。その、「嫌だ、想像したくないからやめて」って言ったら、「じゃあまあ岩本には話さないようにするわ」とか言って。

本項の分析から、女性集団で性行為の内容や男性の身体が話題になることは稀であり、話題にされる場合も、特に親しい関係に限定される傾向が読み取れる。同性同士の絆の差異という観点からは、男性集団では「女の交換」が見られる一方、女性集団には「男の交換」が見られないことが指摘できる。同性同士の絆の差異が男女間の権力関係と関連するという Sedgwick (1985/2001) や堀江 (2015) の議論を踏まえると、こうした会話の差異は、女性集団の会話もミソジニーと無縁ではなく、その規範が反復されていることを示唆している⁴。

⁴ これは男性の身体を客体化する会話や、それが集団外に広がるという問題が女性集団では生じえないという主張ではない。筆者が男性であるために、そうした事例が秘匿にされた可能性があるからだ。しかしインタビューでは、特に親しい関係でのみ話される内容も語られており、女性集団における会話は少なくとも部分的に開示されている。また、男性の身体を客体化する会話が筆者の性別ゆえに秘匿にされたとすれば、それは男性集団のミソジニーが女性のいる空間に滲出する一方、女性集団のそうした会話が「内々で」行われるという論旨に沿うものである。ゆえに「語られていないこと」は、そうした事例が存在しないことも、本稿の議論が破綻することも意味しない。そのため本稿では、調査の限界を踏まえつつ、語られた内容に基づいて分析を行う。

5 身体的なふるまい・同性同士の身体接触に対する言動とホモフォビア

5-1 男性集団におけるホモフォビックな言動とホモソーシャリティの構築

次に、ホモフォビアに着目する。男性集団におけるホモフォビックな「ジョーク」としては、身体的なふるまいに関するものが多く語られた。例えば、結城さんは次のように語った。

結城：ちょっとそういう仕草をして笑いを取るやつがいて。そういうのに対しては「オネエ」とか言っていましたね。[…]

筆：どういう感じの仕草なんですか？

結城：なんかこう、身体をくねくねさせるとか。なんだろう、ゲイバーみたいなことを知ってた、話題に出したやつもいて「これじゃん」みたいな、「こういうことやってよ」みたいなことも言って。

まささん、高橋さん、畠さんなどからは、走り方や打ち方、悲鳴をあげるなどのふるまいに対して「オネエ」という言葉が使われた経験が語られた。こうしたホモフォビックな「ジョーク」も「傷つく人はいない」ことを前提とする。例えば結城さんは、前述の事例について「気持ち悪い」という感覚はなく、「そいつの普段の姿も知ってるし、それはノリでやってるってことも知っているの」と語った。また、まささんに「「オネエ」みたいな「ノリ」についても、仲の良さとかは関係しますか？」と尋ねると、次のように語られた。

まさ：今思ったのは、相手をどれぐらい傷つけちゃうかっていう予想ができる人と、できない人っていうので、ラインがわかれるのかなって思いました。[…] めっちゃ仲が良いって判断してたら、ある程度。うーん。言論の幅っていうのは広がってきて。その中に「オネエ」とか「ホモ」とか、そういう言葉も含まれてて。

ホモフォビックな「ジョーク」は男性集団の特別な関係によって可能になると認識されている。しかしこれは、その集団からホモセクシュアルな絆を予め排除することで成り立つ論理である。そうして「傷つき」の可能性がないことにし、

同性愛を攻撃する「ジョーク」が反復されることで、異性愛規範に服従する主体が形成されると考えられる。

だが、ホモフォビクな「ジョーク」が相手を傷つけない範囲で行われるという認識も幻想である。バイセクシュアルを自認する佐藤守さんは高校の男子テニス部で「ゲイやなあ」と言われた経験を語った。それは、仲が良くかわいいと思っていた部員とのスキンシップ、つまり身体的な近さに向けられたものだった。そのときの思いを尋ねると、佐藤守さんは次のように語った。

佐藤守：いや、なんかすごい否定されてる感じだったんで。強く、あの、辛かったですね。それは。[...] 直接的ではないんですけど、その同性愛を否定するような感じがちょっと垣間見えたので、そこは辛かったです。

筆：[...] 言われる側としては辛い経験だっていうふうに思うんですけど、その言ってる側ですよ、の雰囲気ってどういうものだったんですか？

佐藤守：まあ、ちょっとからかうぐらいな雰囲気だったと思います。[...] 悪意はたぶん、なかったと思うんですけど。

佐藤守さんからは、こうした「からかい」に抗議した経験も、抗議しようと思った経験も語られなかった。むしろ、それが「大ごとになることはなかった」という。ホモセクシュアルな絆の予めの排除と抗議の意思を奪う「からかい」の特徴が、その対象とされる人の心的負担を覆い隠しながら、ホモソーシャリティの構築とそれによる主体化＝服従化のプロセスを安定させていると考えられる。

5-2 女性集団における身体接触と同性愛嫌悪

女性集団における身体的な近さに関する語りは、男性集団とは異なっている。例えば女子バスケットボール部に所属した山本さんは、「手つなぐとかはよくあります、めっちゃ。[...] 腕組むこともありますし」と述べ、それは「別に嫌じゃないし、嬉しいですね」と語った。また平野さん、岩本さん、Lさんなども「抱きつく」「手をつなぐ」「胸を触る」といった身体接触について語った。山田さんが、ハグなどは「コミュニケーションとか、スキンシップの1つ」であり「日常的にあったことです」と語るように、女性集団では身体接触を禁じる力が

働いていないと考えられる。一方で、こうした身体接触が抵抗感を生むこともある。女子テニス部に所属した田中咲さんは、「人前でハグとかするのが、ちょっと緊張したりとかはしますね」と語った。そうした行為への対処について尋ねると、田中さんは次のように答えた。

田中：そんな恋人つなぎみたいな感じになったときとかは、もう「何してんの」って言ってこう外したりとか、したり。ハグの場合は「はいはい」みたいな感じで、事を収める感じで、こうできるだけ、そういう状況になる時間を減らすようにしてたかなって思います。

筆：なるほど。多少、抵抗感っていうか、があったような感じですかね？

田中：そうですね。抵抗があったのかなって思います。なんか本当にどうしていいかわからないみたいな感じだったので。

平野さん、鈴木さん、山田さんも身体接触に一定の抵抗感を抱いていた。例えば鈴木さんは、「自分はやっぱり男の子になりたかった時期があって、その、胸が嫌な時期があったんですよ」と述べ、特に小学校高学年の成長期以降、胸を意識させられる身体接触が好きではないと感じてきたと語った。女性同士の絆の連続性が一般的に共有され、身体接触が親密性を確認する作用を持つがゆえに、抵抗感を表明しにくい状況がある。

また、女性同士の絆の連続性は同性愛嫌悪が存在しないことを意味しない。高校で女子サッカー部に所属し、同部の女性と交際関係にあったLさんは、「女の子同士、気持ち悪い」というような否定的態度を示す部員がいたと語った。その否定のされ方について、「直接言われるんですか？」と尋ねると、Lさんは次のように答えた。

L：なんかもう避けていったんですけど、その子が。自分たち2人でいたときに避けていくんですけど。なんか周りを通じて、なんか「あの子はあんまりよく思っていない」というのは聞いたことがあります。

筆：それはもう「いじり」というよりは、もうなんか、完全に避けている。

L：避けてましたね、はい。1対1のときは全然喋って、喋るんですけど。2

人でいたら避けていくっていう。

この事例からは、女性同士の絆の連続性を「女性同性愛は許容されやすい」という表現に換言できないことがわかる。堀江（2015）が述べるように、ホモソーシャリティによって維持される異性愛主義のもとで、女性を客体化するミソジニーはレズビアンを不可視化し、抹消する。女性同士の身体的な近さを監視する力が働かないことや、可視化された女性集団内の交際関係への否定的態度は、こうした規範の作用を受けている。そして、女性集団の絆が男性集団とは異なる形で統制されることは、この規範が女性集団でも反復されていることを示唆している。

6 教師による性や恋愛に関する「ジョーク」

次に、事例数は少ないが、教師の言動に着目する。高校で水球部だった小林さんは3年間クラス替えがないスポーツ科に在籍した。生徒同士だけでなく、10名ほどの体育教師との関係も密になるスポーツ科は、「第二の家族」のようだったという。水球部顧問の男性体育教師が生徒の交際関係を「いじる」場面があったことについて、それに対する認識を尋ねると、小林さんは次のように語った。

小林：そういうのはなんか「スポーツ科のノリ」っていうか。まあ別に違和感を感じることはなかったですけど。[…]「あー、なんかいつもの風景や」ぐらいの。

この教師は、部活動の際には更衣室に入り、男性部員に恋愛や性行為の経験を聞いていたという。そうした会話への認識を尋ねると、小林さんは再び「なんかいつも通りだなあ」と、日常性を感じていたことを語った。教師がそうした言動をすることへの認識をさらに深掘りして尋ねると、次のように語られた。

小林：嫌やなあっていうところはないですし。関わりにくいなのは[…]思わないんですけど。[…]なんか違和感はありますよね。なんか「先生か？」っていうぐらいですかね。

筆：むしろその何でしょうね。その違和感が […] ネガティブに働くのか、まあ、なんか先生やけどこんなこと言ってるのって、なんか好感が持てるというか。どうなるんですかね？

小林：それはちょっとほんまに人によってっていうところで。結構「なんであの先生、あそこまで言わはんの？」みたいな人もいたし、「めっちゃおもしろいやん！」っていう人もいるしっていう。

スポーツ科や水球部の日常性を感じさせる体育教師＝顧問の言動が、「嫌」「関わりにくい」という感覚につながらない点は重要である。それはむしろ、教師と生徒の親密さを確認する効果をもつ。ただし、その受け取り方が「人によって」異なる点は確認しておく必要がある。

高校のウェイトリフティング部で女性として活動していた鈴木さんは、男性部員から「普通に〔体育教師である顧問の〕先生も〔下ネタを〕喋るよ」と聞いていたが、「女子にはあんまり言わなかった」と語った。しかし鈴木さんは、「自分たち〔女子部員〕にも言ってくれてもいいのに」と感じていたという。教師による「下ネタ」への認識を尋ねると、次のように語られた。

鈴木：なんかそこまで話してくれると、[…] 仲が良いわけじゃないですけど、その良い関係で先生と接せられてるのかなっていうのは感じますね。普通は喋らないと思うので、生徒に。だから、なんか聞いたら、「あ、なんか心聞いてくれてるのかな」ってちょっと思いますね。

鈴木さんは別の箇所でのこの教師を強く信頼していたと語った。だからこそ特別な関係の表現として、「下ネタ」を「自分たちにも言ってくれてもいいのに」と感じている。少数の事例ながら、「下ネタ」を共有できる関係が特別視される点は教師―生徒関係にも当てはまることが示唆される。しかし、小林さんの事例と比べると、「下ネタ」が男性同士の「ノリ」として理解されていることも、教師―生徒関係に当てはまると推測される。

他方、中村さんは、高校の体育教師である顧問が生徒とのコミュニケーションにおいて「下ネタ」を用いていたことについて、「僕はなんか結構、そういう

の得意じゃないんで。[…] なんか言っってはるな、みたいな」と語った。こうした冷めた感情を表に出した経験は語られていないが、教師が「下ネタ」を活用する一方で、その意図の通りには受容しない人があることも見逃してはならないだろう。

7 性や恋愛に関する会話・言動を通じた体育教師の主体形成

インタビューの終盤では、体育教師として働く際に生徒による「ジョーク」を伴う会話・言動にいかに対応したいかを尋ねた⁵。高校で体育教師として勤務する高橋さんは、ホモフォビックな「ジョーク」について、次のように語った。

高橋：やっぱ当時はもう楽しくて、そういうの言っただんですけど。今こう教師になって思うのは、まあよくはないなあと。[…] でも、いざ自分が経験してきたその楽しい感じは、高校生みんなに、やっぱその、高校時代ぐらいでしか味わえないと思うので。まあ、人をほんまにこう傷つけへん、いじめとかならん程度だったら、もうその本人らがわかってるんやったら、全然いいかなとは思いますが。

また、結城さんは「教師はそこに関わりすぎちゃいけない」としつつも、「いじられてるやつが、まあ嫌がってるとか、なんか無理しているなっていうのを感じ取るのであれば、そこはこう、ちょっと介入しなきゃいけない」と語った。さらに「男同士のノリで、それを[…] やめろって言っても絶対無理なんで」とも語っている。

これらの語りでは、男性集団のホモフォビックな「ジョーク」は避け難いものと捉えられ、その許容範囲は「傷ついているか」「嫌がっているか」を基準に判断されている。つまり問題化されているのは「ジョーク」そのものではなく、心的な「傷つき」である。しかし、ここまで見てきたように「ジョーク」は「傷つ

⁵ この質問はインタビューガイドに含まれておらず、全員に尋ねたものではない。特に、女性集団における性行為などに関する会話は個人的な相談として行われやすいこと、また女性集団での「からかい」はインタビューでは多くは語られなかったため、「対応を要する」ことを前提にした質問は憚られた。そのため、本節の分析は男性集団に属していた人の語りを中心となっている。

く人はいない」という前提で行われ、実際に生じる傷つきは覆い隠される実態がある。したがって、運動部活動を通じたホモフォビックな規範への服従が、傷つきの有無で許容範囲を判断しつつも、実際にはそこに介入しない体育教師の主体形成につながっていると考えられる。

他方で、小林さんは「レズ、ゲイ、ホモ、オネエとかに関しては、ちょっと指導しないとイケないかなと思うんですけど」と述べ、山本さんも「まあ今結構 […] そのLGBTとか進んでるから、もっと学校でこういうの [レズ、ゲイ、ホモ、オネエなどの言葉] を言わんようにしないとあかんって、教える立場で言うと思います」と語った。ここでは、性的マイノリティの存在が可視化されつつある社会状況を踏まえ、差別的と捉えられうる言葉の使用への介入の必要性が語られている。当然のことだが、体育教師の主体形成は社会の変化にも影響されるため、そのような言説を豊富にすることの重要性が示唆される。

ミソジニスティックな会話への介入の必要性も、「傷つき」との関係で語られた。例えば性行為の経験を共有することについて、小林さんは「僕の感覚では悪いこともないし。 […] 仲間内なら全然いいかなぐらいの感覚あります」としつつ、「明らかに対象の子が嫌そうな感じじゃなかったら別にいいかなっていう […] 笑ってても、何を思っているか分からないんで」と語った。ミソジニスティックな会話も、自身の経験をなぞるように「基本的には無害だが、嫌な人がいるのはよくない」と認識されている。この点からも、運動部活動における「ジョーク」を通じた体育教師の主体化＝服従化が読み取れる。

他方で、中村さんは次のように語った。

中村：中学校ではそういうの [性や恋愛に関すること] に興味を持つ子が増えてくると思うので。保健の授業で、こういう、僕みたいに嫌やって感じる人もいるんやでっていうのを、ちゃんと伝えたいなとは思ってました。

「傷つく人はいない」ことを前提とする「ジョーク」を通じたミソジニスティックな規範への服従が体育教師の主体形成の一部だとすれば、中村さんは規範からの「ずれ」が顕著な例である。中村さんの事例は、具体的な抵抗の行為は伴わずとも、心的な生を通じて行為能力を引き受けた主体形成の可能性を示して

いる。ここに、ジェンダー規範を身体化した体育教師の再生産への抵抗の可能性が見出されるのである。

8 結論

本稿では、運動部活動における性や恋愛に関する会話・言動を体育教師の主体形成における重要な実践と捉え、その実態を分析した。特に男性集団のミソジニスティック／ホモフォビックな「ジョーク」は「傷つく人はいない」という前提で反復されている。他方、女性集団の会話・言動にもまた、女性を性的に客体化し、レズビアンを抹消するホモソーシャリティの作用が読み取れた。この知見は、男性集団を中心に考察してきた先行研究に対し、ホモソーシャリティに基づく社会構造が女性集団にも影響することを示している。そして、生徒が行う「ジョーク」への介入基準が「傷つきの有無」にあるとする男性集団に属していた人の語りからは、運動部活動を通じたジェンダー規範への服従が「ジョーク」や「からかい」に介入しない体育教師の主体形成と関連することが理解できる。

また本稿では、心的な傷つきや抵抗感が規範に従った行為の強制により覆い隠されることも示された。ホモソーシャルな社会構造の中で女性・男性集団それぞれに特徴的な会話・言動が観察される一方で、そこで生きる人たちは多様な性のあり方とも関わりながら、それぞれに固有の心的な生を営んでいる。笑ってごまかす、抗議をしないという行為は規範への服従として理解されうるが、心的な生において、規範は単純に反復されているわけではないのである。表出された行為だけでなく心的な生に目を向けることは、運動部活動を通じた「良心的」な体育教師の主体形成に疑問を付す。さらに、そこで心的な傷つきを抱えた人が「ジョーク」の問題性を伝える体育教師になっていく可能性も示された。心的な生に注目した分析により、ジェンダー規範を身体化した体育教師の再生産への抵抗について論じた点に、本稿の独自性がある。

さらに、体育教師の主体化＝服従化において「傷つき」が「ジョーク」への介入基準となることを踏まえると、心的な傷つきの可視化は介入の可能性を高めるだろう。つまり、覆い隠されがちな心的な生について学校や教師教育の中で語っていくことも、ジェンダー規範を身体化した体育教師の再生産への抵抗となる。これが、本稿が提示する実践的な意義である。

本稿では、運動部活動における性や恋愛に関する会話・言動を分析し、体育教師の主体形成について考察した。しかしその分析は、そうした会話・言動の経験と体育教師志望のプロセスを直接結びつけるものではない。この点を検討するためには、運動部活動において同様の経験をしながら体育教師を志望している高校生などに直接アプローチする必要がある。また、本稿では女性集団の事例も扱ったが、特に7節の分析は男性集団に属していた人の語りにより依拠しており、女性集団における性や恋愛に関する会話・言動を通じた体育教師の主体形成についてはさらなる検討が必要である。最後に、心的な生への注目により抵抗の可能性について議論したが、顕著な事例として確認できたのは中村さんだけだった。今後は、より多様な事例を可視化し、同一化可能な体育教師の主体を増殖させていくことが求められる。

付記

本研究はJSPS科研費21J12683の助成を受けたものです。

References

- Althusser, L. (2005). 「イデオロギーと国家のイデオロギー諸装置」. 『再生産について』(西川長夫, 伊吹浩一, 大中一彌, 今野晃, & 山家歩訳). 東京: 平凡社, pp.319-378. (Original work published 1995).
- Butler, J. (2019). 『権力の心的な生』(佐藤嘉幸 & 清水知子訳). 東京: 月曜社. (Original work published 1997).
- Dodds, P., Placek, J. H., Doolittle, S., Pinkham, K. M., Ratliffe, T. A., & Portman, P. A. (1991). Teacher/coach recruits. *Journal of Teaching in Physical Education, 11*, 161-176.
- Doolittle, S. A., Dodds, P., & Placek, J. H. (1993). Persistence of beliefs about teaching during formal training of preservice teachers. *Journal of Teaching in Physical Education, 12*, 355-365.
- Hutchinson, G. E. (1993). Prospective teachers' perspectives on teaching physical education. *Journal of Teaching in Physical Education, 12*, 344-354.
- Morrow, R., & Gill, D. (2003). Perceptions of homophobia and heterosexism in physical education. *Research Quarterly for Exercise and Sport, 74*(2), 205-214.
- O'Brien, K. S., Shovelton, H., & Latner, J. D. (2013). Homophobia in physical education and sport. *International Journal of Psychology, 48*(5), 891-899.
- Riessman, C. K. (2014). 『人間科学のためのナラティブ研究法』(大久保功子 & 宮坂道夫監訳). 東京: クオリティケア. (Original work published 2008).
- Sedgwick, E. K. (2001). 『男同士の絆』(上原早苗 & 亀澤美由紀訳). 愛知: 名古屋大学出版会. (Original work published 1985).
- 朝倉雅史. (2016). 『体育教師の学びと成長』. 東京: 学文社.
- 朝倉雅史, & 清水紀宏. (2011). 「体育科教員への入職過程と運動部活動を通じた経験」. 『いばらき健康・スポーツ科学』, 28, 1-17.
- 江原由美子. (2021). 「からかいの政治学」. 『増補 女性解放という思想』. 東京: 筑摩書房, pp.238-263.
- 堀江有里. (2015). 『レズビアン・アイデンティティーズ』. 京都: 洛北出版.
- 井谷恵子, 片田孫朝日, & 若林順子. (2006). 「体育授業におけるジェンダー体制の生成」. 『スポーツとジェンダー研究』, 4, 4-15.
- 加藤凌, & 佐藤善人. (2023). 「中学校保健体育教師の男女共習体育授業に対する認識に関する一考察」. 『スポーツ教育学研究』, 43(1), 13-31.
- 三上純. (2020). 「運動部活動におけるホモソーシャルリティの形成」. 『スポーツとジェンダー研究』, 18, 20-34.
- 三上純. (2022). 「運動部活動におけるミソジニスティック／ホモフォビクな会話と性別意識」. 『女性学』, 29, 76-104.
- 三上純. (2023). 「体育教師の固定的なジェンダー観と運動部活動文化の関連について」. 『スポーツ社会学研究』, 31(2), 59-75.
- 三上純, & 井谷恵子. (2018). 「教員養成課程の学生における性的マイノリティに関する知識と意識についての研究」. 『スポーツとジェンダー研究』, 16, 36-47.
- 坂本拓弥. (2013). 「「体育教師らしさ」を担う身体文化の形成過程」. 『体育学研究』, 58, 505-521.

Abstract

Physical Education Teachers' Subject Formation through Conversations and Behaviors Related to Sexuality and Romance in Athletic School Club Activities

Jun MIKAMI

Previous research has highlighted that physical education (PE) teachers often embody gender norms, for example by categorizing students strictly as “girls” or “boys” and by overlooking homophobic remarks made by students without intervention. Recent studies have examined how such PE teachers are produced, focusing on the functional aspects of conversations and behaviors concerning sexuality and romance in athletic school club activities. However, previous studies have primarily focused on male groups, and have paid insufficient attention to the psychic lives of those involved. Furthermore, by focusing on the reproduction, the possibility of resistance has not been sufficiently discussed. Building on previous studies, this study conceptualizes conversations and behaviors related to sexuality and romance in athletic school club activities as key practices in the formation of PE teachers' subjectivities, and analyzes their dynamics with particular attention to women's experiences and the psychic lives of those involved. On this basis, the study aims to examine both the formation of PE teachers who embody gender norms and the possibilities for resistance to their reproduction. This study drew on narrative research, specifically thematic analysis, based on interviews with 18 individuals who participated in junior high school and high school athletic club activities. Butler's theory of subjection, Sedgwick's concept of homosociality, and Horie's interpretation of the latter provide theoretical frameworks. The analysis revealed that misogyny and homophobia were repeated through “jokes” performed under the assumption that “no one gets hurt” particularly in male groups. In female groups, different dynamics

emerged that could be understood in relation to the sexual objectification of women and the erasure of lesbian identities. When imagining how they would respond to students' "jokes" as PE teachers, participants tended to assume approaches aligned with the norms to which they themselves had previously conformed. This suggests that conformity to gender norms through participation in athletic school club activities is closely related to the formation of PE teachers' subjectivities. At the same time, by focusing on the psychic dimension, the study uncovered how these "jokes" often generate feelings of hurt and resistance, thereby undermining the assumed harmlessness on which the process of subject formation relies. The analysis also revealed the potential for individuals who carry such psychic wounds to become PE teachers capable of addressing and problematizing these "jokes." This calls into question the formation of PE teachers as "conscientious" subjects through participation in athletic school club activities. By combining Butler's theory of subjectivation with an analysis of everyday conversational practices, this study offers new insights into how gender norms are inscribed onto bodies in educational contexts and how psychic traces of injury may provide resources for resisting their reproduction.

Keywords:

psychic life, subjection, misogyny, homophobia, homosociality

